

---

# グリード

ブライダルベール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グリード

### 【Nコード】

N4419Z

### 【作者名】

ブライダルベール

### 【あらすじ】

自他ともに認める異常者・欠損者の主人公が死んでしまいました。しかし、神を名乗る御爺さんのおかげで、彼の念願が叶うかも知れない。はたして、彼はどのような道を歩むのか……  
初投稿・更新不定期・誤字脱字に寛容な方で少しでも興味を持っていただけたら是非目を通して下さい

## 暗闇の夢（前書き）

初投稿です。最後まで書けるか分かりませんが、温かい目で見守ってくださーい。

## 暗闇の夢

此処は何処だ。

光の一切が無い暗い暗い空間。

上下左右の無い空間。

．．．．．

．．．

．．．．．ああ

また、あの夢か。

今度はどんな夢になるんだろうか。

今の私ならどんな状況だろうと楽しめるだろう。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．おかしい？

何も起きないのは、おかしい。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

退屈だから何か考えてみるか。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．という事は、やはり世界という物は認識によって．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．いやしかし、その考えにいくためには基盤とな．．．．．

．．．．．

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ぬ……えて……か  
ん？」

何か聞こえた。

・  
・  
・  
・

気のせいかな？

「気のせいではないぞ」

・  
・  
・  
・  
・

・  
・

えっと。

気を取り直して、何処まで考えてたっけ。

「話を聞きなさい。」

は。

誰だ、この御爺さん。

「誰だとは、失礼じゃのう。」

ん？

私の考えを読んでいるのか？

「そうじゃ。」

覗き趣味は流石に自重すべきかと。

「……驚かんのか？」

いゝや、覗き趣味の方が極めると思考まで覗けるようになるという事は、実に驚きましたね。

「いやいや、違うからの、それにしても、おぬし変わっておるの。」

「よく言われます。けど、私は、変人じゃ無いですよ。でも、常人でも無いですね残念ながら。私は、ただのしがない異常者です。もしくは、ただのしがない欠損者ですね。」

「いや確かに常人や言い方はおかしくなるが、並みの異常者や欠損者なら直ぐに己の存在を認識できなくなり輪に戻るんじやが。如何なっておるんじや。」

「うゝん。私が並みではない、という事じゃないですか。それで説明できますしね。」

「ただし……」

「ただし何じや。」

「ただし、貴方の“言った事が正しければ”、ですけどね。」

「つな!? おぬし儂の言う事が信用出来んのか。儂の事を誰だと思っっておる!?!」

「つえ!?!」

「変な御爺さんもしくは、更年期障害末期の御爺さんじゃないんですか!?!」

「違つわ!?!?!?!?!」

「じゃあ誰なんですか?」

「ふむ自己紹介がまだだったかのう。」  
「はい。」

「儂は、神じや。」

### 3つの願

は？

「何じゃ、聞こえんかったか。ならもう一度、儂は神じゃ。」  
えっと？

お疲れ様です？

「信じておらんか？」

そんな事無いですよ。そうですね、貴方は神様（自称）です。きつとこれから良い事沢山ありますよ。そうだ！！私囲碁・将棋・チェスが出来るんですけど、打ちますか。あ！そうそう知り合いが良い温泉知ってるらしいんですけど、行きませんか？そうだそうだ！！神様（自称）がいっぱい居る所知ってるんです、紹介しますよ。いや、きつと他の神様（自称）たちも喜びますよ。」  
「おぬし、いい加減にせんか！！！」

？

何かしましたか？

「・・・おぬし、何者じゃ？」

はい？

「何とも無いのか？」

何ともの何も、何とも無いですが？それが何か？

「まあ、いいとしようか。」

??何がですか？

「気にするでない。」

分かりました。所で私に何か用ですか？

「そうじゃった、そうじゃった。おぬし、自身がどのような状態か解っておるか？」

うん？少し待ってください。

「うむ、かまわんぞ。」

.....

.....

ああ、私死んでますね。そっか、残念ですね。

「.....それだけかろう？」

いや、柄じゃない事はする物じゃないですね。つま、自己満足は出来ましたし良しとしますか。そうそう、先程は疑ってしまっすいませんでした。

「.....うむ、おぬし壊れておるな。」  
「そうですね。」

「まあ、よい。本題に入がよいか？」

「かまいませんよ。」

「おぬし、何か望みは無いかろう。」  
「望み？」

「そうじゃ、3つ叶えてやる。」

「対価に私は何をすれば？」

「話が早いろう。そうじゃのう。異世界にとんでもらう事と、偶に儂がする頼みごとを聞いてくれればよい。どうじゃ？」

「いいですよ。というか、私にはyesしか、選択権ないですよね。」

「頭も切れるようじゃな。では、望みを3つ申してみるがよい。」

「そうですね。その前に良いですか？」

「なんじゃ？」

「願というのは、異世界にとんだ際役立つ能力とかでもいいんですか？」

「うむ、かまわんぞ。さて、望みを申してみよ。」

「そうだな。」

「一つ目は、万物の生成と付与の能力とかはどうですか？」

「一つの願としては、駄目じゃな。」

「では、ある程度条件等を縛れば一つの願として扱うのは可能ですか？」

「うむ、可能じゃ。」

「じゃあ、血液に能力の付与とかはどうですか？」

「可能じゃ。」



二つ目は、世界を渡る能力は絶対に欲しいんですが。

「理由を聞いてもいいかのう。」

いいですよ。理由は、私の生きて居た時の座右の銘が 全てを知り  
全てを楽しめ だからです。

「おぬし……いやなんでも無い。」  
可能ですか。

「ギリギリ可能じゃ。じゃが、儂が良いと思うまでは異世界には渡  
れぬし、行先はおぬしには決めれないがよいか？」

かまいませんよ。

「うむ、なら承った。」

ありがとうございます。

三つ目は、私の母・一番上の姉と二番目の姉と姪と甥の人生に幸多  
からんことを願います。

「ほほほほ。」

何かおかしいですか？

「いや、何、少し意外だな。」

私が異常でも欠陥品でも感謝はしますよ。

「ほほほ、悪かたの。あい、解った。では、行ってもらえるかのう。」

「

ありがとうございます。

では、私は何時でも行けます。

「ではのう。」

はい。

「そうそう。」

何です。

「おぬしが、助けた子は無事じゃ。」

……そうですか。

・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・

「行ったか。歪んでおったが悪い奴では無さそうじゃなかったのう。  
しかし、あやつの座右の銘まるで、グリードじゃな。ちと、あやつ  
の事を調べるとするかの。」

## 能力の行使（前書き）

これから、たまにアンケート的な物取るかも知れないので、その時は協力してください。

## 能力の行使

「……う……ん……」  
目を擦りながら、彼は目を覚ました。

「……」  
暫く呆然としながら、彼は辺りの状況を把握しようと辺りを見回す。  
「……森？」

そう、見渡す限り木木木であるから、森意外に表現が出来ないのは、彼の表現能力が乏しい事とは関係なく、彼の周りは正しく森だったためだ。

「これから如何しようかな？」  
彼は、これからの事を考える。

（とりあえず、えつと……イメージしよう、能力の付与。まずは、どんな危機からも生き残れる様に。皮膚が誰か他人に裂けられた瞬間に血液が高硬度高質化する様に……イ……メ……ジ……  
……うぐ……ぎ）

その瞬間異変が起きた！！

（か……ら……だ……が……動か……ない……）

・  
・  
・

暫く時が過ぎ、彼はようやく動けるようになった。そして同時に自身の能力も理解しはじめた。

（そうか、急激な変化には体が悲鳴をあげてしまうのか。それと、付与は私自身が、理解出来ていない事でも知っていたり、見ていたら付与できるのか。）

彼は、解った事を頭の中で纏める。

（なら最初にやるべき付与は・・・イメージ・・・うぐ・・・が・・・あああああ!!!!!!）

彼は、愚かで浅はかな事をしていた。いや、成功すれば最善の行動だったのかもしれない事を。だが、彼の意識は暗く遠のいていった。

・・・  
・・・  
・・・

また暫く時が過ぎ、彼は目を覚ました。

(・・・成功したみたいだ。良かった。でも、複数同時に付与を行うと体が持たないな。けどその心配ももういらないけどね。)  
付与に成功したことに安どし、一息つくことにした。

「・・・一息つくにもお茶も何も無いな。・・・町でも探  
すか。」

そう言っつて彼は、森を歩き始めた。

・  
・  
・

「きゃー!!!!!!」

何処からか悲鳴が彼の耳に届いた。

「・・・情報が有れば、選択肢が広がるかな？」

彼は、この世界の事を聞くために声のした方向に歩み始めた。

少し離れた場所に、小さな崖の様なものがあった。そして彼が辺り  
を見渡すと外套を被った子供が一人倒れて居た。

「よりによつて、子供かよ。・・・おい。生きているか？」

「・・・うう。」

子供は生きていたようだ。

「意識は・・・無し。外傷は・・・左足骨折・・・擦り傷多数

打撲多数・・・どうしようか・・・まあ、助けるか・・・  
つー!!!」

彼は、子供の外傷を一通り調べ上げてから親指の皮膚を噛み千切つた。

(イ・・・メー・・・ジ)

そして、彼は、子供の口に一滴自身の血を飲ませた。

「よいつしよつと!!!」

彼は、子供を抱き抱えて休める場所を得る為に、町を探しにでた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「……何!? ……それは……本当か? ……解  
った……」

何所か古びれた神殿の様な場所。

しかし、何所か近代的な外見を持つ物もある、矛盾をはらんだ室内  
で老人はひとり呟く。

「……これは、厄介な事をしてしまったのかもしれんの。……  
早々に手を打った方がよいのか? ……」

老人はそう呟きながら立ち上がった。

だが、立ち上がったと思つた老人の姿は其処には無く、沈黙だけが  
室内存在していた。



## 彼の狂気

時がたち、辺りも暗くなってきた最中。

彼はまだ、森にいた。

(困ったな、何処にも町らしきものが無い)

彼は子供を抱き抱えた状態でもう長い事歩いていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「・・・ところで、何か御用ですか？」

彼は、唐突に誰も居ない場所に話しかけた。

「気付いてんなら話があえ。身ぐるみとその餓鬼置いて、怪我しないうちにとつとと失せな。」

しかし、木蔭から柄の悪い男が威圧しながら出てきた。

「はい。解りました。少し待ってください。」

そう言いながら彼は木に子供を齎せながら優しく座らせる。

「話の早い奴は好きだぜ、でも、さつさとしな、俺は気が長くないんだ。」

柄の悪い男は下劣な笑みを浮かべながら彼を急かす。



い音が響く。

しかし、彼の蹴りは男の左腕を折ってなを、勢いを殺さずに蹴り抜く。そのため男の左腕から赤黒く染まった骨が露出し、男は痛みに耐え切れずに悲鳴を上げる。

「痛てー！！た、た、助けてくれ！！見逃してくれ！！」

男は見つとも無く腰を抜かしながら、彼から距離を取ろうとする。

「え？嫌だけど？」

彼は気にもせずに、おとこに詰め寄る。

「ひっ！！！！・・・」

「あらら、気を失っちゃた。如何しようかな。」

彼は、気絶した男を見ながら如何しようか思案する。

## 神の贈り物

彼は困っていた。

目の前で気絶した男をこれから、如何するかを。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

(無理やりにも起こして、近くに村が無いか聞こうかな。その後  
でまた考えればいいよね?)

彼がそんな風に結論を出した時、頭に直接声がしてきた。

《おぬし、少しいいかのう?》

(いいですよ。御爺さん何か用ですか?)

《いやなに、おぬしにプレゼントをな。》

(.....)

《何じゃ、嬉しくないのかのう?》

(.....何を私はすればいいんですか?)

《うむ、いや、特に何をする事は今のところ無いぞい。》

(では何故?)

《おぬしに与えた能力で直接戦うと何かと目立つからの。だから、おぬしのために武器を用意しておいた。ベースになっておるのはダインスレイフじゃ知っておるか?》

(確か、北欧神話に出てくる魔剣で・・・なるほど、おおかた私の血液をその剣の媒体にして情報収集でもするつもりですね。)

《・・・考えが飛躍しすぎじゃ。使い方はおぬしの血を一滴吸わせてやれば解るからの。それと、名前は如何するんじゃ?》

(名前?)

《おぬしの名前と、この剣の名前じゃ。ちなみに、おぬしの居る辺りの名前は中国系の名で、さらに“真名”と呼ばれる神聖な名があるんじゃ。》

(じゃあ、御爺さんが真名と武器の名前付けてくださいよ。)

《それだけで良いのかの?》

(碎けた話、名前なんて基本興味無いですし。真名と武器だけで良いですよ。他のは、偽名使いますから。)

《うむ、解った。ならば、おぬしの真名を“真”、武器の名を“赤蓮”でどうじゃ?》

(解りました。何処で受け取れば?)

《・・・感想なしなんじゃな。武器は、ほれ。》

ドス

彼の右側に何故か鞘に入ったままで“日本刀”が地面に刺さっている。

(何故に、日本刀?)

《気分じゃ。》

(まあ、ありがとついでいます。)

《達者でのう。》

彼は右側にある。日本刀を地面から抜き出し鞘から刀身を抜き、自身の血を一滴垂らした。

その瞬間、彼の頭に様々な情報が入って来た。

「これは、使えるな。」

そう呟き、彼は気絶している男に、斬り先を少し当てほんの少しだけ出血させた。

そして、男がどのような人生を歩んできたか。一瞬で理解した。

「うん。思ったより詰まんかったな。もういいや。」

彼は、そう言い放ち男の首を斬りをとした。

「よいつしょと。さて、町はこっちで良いのかな？」

彼は、子供を抱き抱えると町の方に歩き始めた。

## 神の贈り物（後書き）

次回は、チヨツとした主人公設定を公開します。ネタバレになる事も躊躇なく書きますんで、ネタバレ嫌いな方などは、飛ばして読んでください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4419z/>

---

グリード

2011年12月18日03時51分発行